

「若者と県議会との意見交換会」の概要

〔日 時〕 平成30年12月18日(火)13:00～15:00

〔場 所〕 岩手大学釜石キャンパス セミナー室

〔テーマ〕 地元の資源を生かした三陸地域の振興について

〔参加者〕 (8名)

| | |
|---------|---------------------------------|
| 秋 津 拓 克 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |
| 阿 部 孝 祐 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |
| 遠 藤 裕 介 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |
| 小笠原 咲 紀 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |
| 小 田 彩 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |
| 櫻 井 悠 平 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |
| 吉 川 昌 吾 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |
| 谷 瀬 香 保 | (岩手大学 農学部食料生産環境学科水産システム学コース 3年) |

〔担当教員〕 (1名)

後 藤 友 明(岩手大学農学部 准教授)

〔出席議員〕 (7名)

城内よしひこ議員、伊藤勢至議員、田村誠議員、阿部盛重議員、岩崎友一議員、
田村勝則議員、高田一郎議員

〔事務局職員〕 (7名)

◆ 学校紹介

○後藤友明准教授

私は、平成28年度の岩手大学の学部改組に伴い、水産システム学コースに赴任した。

実は、平成27年度までは、岩手県職員として、執行部側にいた。

釜石キャンパスには、今回参加している8名に加えて、6名が10月から学んでいる。さらに、盛岡市の上田キャンパスに6名がおり、合わせて22名が現在、水産システム学コースの3年生第1期生として、勉学と研究にいそしんでいる。

今回、新たにつくられた岩手大学水産システム学コースについて、概要を説明させていただく。

岩手大学は、1949年に鈴木重雄初代学長が、もともと、盛岡農林高等学校を拠点としてつくられた大学である。初代学長は、将来は、農学部の水産分野をつくりたいと標榜していたが、長年、岩手大学農学部には、水産を学ぶ機関、水産を研究するような機関が存在していなかった。

平成23年3月11日に、東日本大震災津波が発生し、沿岸地域にとって、非常に大きな事態が起こった。東日本大震災が起こって、津波が発生し、特にこの地域の基幹産業である水産業に非常に大きな被害をもたらした。岩手県にある国立大学である岩手大学としては、これを黙って見ておくわけにはいかなかった。

もともと、農学部の中に水産コースは存在していなかったため、他大学の力をお借りしながら、水産業に対して何か貢献していこうとして、動いてきた。2011年10月に、ここ釜石サテライトを設置して、三陸復興推進本部の中に、水産業復興部門を設けたことが前身になる。東京海洋大学と、現在は相模原市に移転してしまった北里大学海洋生命科学部と三大学連携協定を結び、岩手大学がこの中に加わるような形で、水産業に対して、何らかの貢献をしていこうとして現在に至っている。平成28年度の大学の学部改組に伴い、農学部の中に食料生産環境学科水産システム学コースを新設すること

になり、平成29年度に大学院に水産業革新プログラムを新設し、6月に釜石キャンパスとして設置している。

大学の学部改組に伴う水産コースの新設についてだが、平成28年度の学部改組に伴い、岩手大学は大きく変わっている。人文社会科学部、教育学部、理工学部、農学部として、それぞれの学部の再編成が行われていて、農学部の中に水産システム学コースが新設されることとなり、そういった流れで、我々が現在いる。

併せて、大学院についても大きく変更があり、これまで人文社会科学研究科、工学研究科、農学研究科として、それぞれ独立の大学院という形で展開していたものを、やはり、社会にマッチした形の総合科学研究科として一つにまとめた。そして、地域貢献を行い、地方の創生に貢献していく学生を輩出するために、総合科学研究科として一つにした中に、水産業革新プログラムを新設し、現在、修士2年の大学院生がこちらにも1人いる。

ここの建物では、大学3年生の後期に釜石を拠点として、教育や研究を進めることになる。

現在は、その一期生の3年生がここに在籍している。次年度以降、さらに、次の第二期生がこちらに来ることになる。少々、現在の建物が手狭になってきており、なかなか、ちゃんとした研究を進めることができないことから、現在、釜石市と岩手県の協力のもと、総合教育研究棟を隣に建設中である。こちらは、5月に出来上がる予定になっており、学生室と、フィールドから得られてきたサンプルを処理し、それを実験したりする研究室等を設け、広く県民の、特に漁業者の方にオープンにしながら、実際にはサンプルを処理したり、海水を測定したりといった取り組みも自由にできるような形で、研究室を設けた研究棟を新たに建設することになっている。

我々の水産システム学コースについてお話するが、議員の皆様にとっては釈迦に説法となると思う。

水産業は、農業や畜産、林業などと違い、実際には海が水産物の直接の拠点となる。海の生態系を直接利用させてもらう産業ということが他の一次産業とは大きな違いであり、海の状況に大きく左右されて、陸上の我々、流通加工、消費者までが一つのシステムとして動いている産業であることが水産業の大きな特色となっている。

こういったことを我々は、それぞれを細分化して分野として分けてしまうのではなくて、一括して、様々な学問を包括的に学ぶことで貢献していく。もちろん、こういった様々な大学であったり、県の諸機関と協力のもと、様々な学問分野で水産業を学び、そして、研究して、最終的には、水産業の復興に結びつけるといったところで、我々は貢献していきたいと、このコースを動かしている。

このコースの目指すものとしては、自然科学分野、海であったり、水産資源であったりという海側の問題と、当然ながら、漁業者、そして流通加工だったり、人側の問題の双方の問題が絡み合うのが、水産業の一番大きな特色となっている。これらを区分できない、水産システム全体の問題として認識して、問題解決として研究分野、普及、教育といった人の立場を含めた形で総合的に研究し、さらには、学生に対して指導しながら、新たな三陸の水産業を構築するために、何らかの形で貢献していきたいと思う。

こういった目標を設け、教育と研究を進めている。我々が設置している教育分野というのは、こういった形で学問分野としては非常に多岐に渡っている。いわゆる水産業を学ぶ立場としては、水産といった冠がつくもののほかに、例えば、地域振興であったり、漁村計画であったり、制度の問題といった様々なものを、今日来ている学生も実際に学んでいる。さらには、こういった座学のほかに、各大学の調査船を利用させていただきながら、実際に海に出て観測をし、そして洋上での生活を送るといったことを体験することによって、総合的な学問を身につけてもらうといったカリキュラムになっている。1年生の時には、東京海洋大学と北海道大学の船に乗って、実際に様々な実習をしている。そのほか、東北区水産研究所に行って、栽培漁業を学んだり、実習船に乗って、こういった調査を体験したり、そのほか、地元の加工業者に行って学んだり、魚市場に行って学んだりといったことを通じて、実際に三陸の水産業について学ぶ機会を設けている。

我々、水産システム学コースは、現在、こういった編成になっている。田中教幸センター長をトップにして、平井教授、塚越助教と私の3つの研究室を展開している。そのほか、上田キャンパスには、経済や、加工分野についての2つの研究室がある。

今回は、釜石キャンパスにある3つの研究室について、今日来ている8名の学生から、御説明したいと思う。

まず、私の持っている研究室は、漁業資源生態学を中心として、魚や、水産資源の成長とか生体の研究や漁業を様々な方面から支援する。定置網の中でのマグロの回遊や、他の魚種との遊泳パターンを調べることで、何とかしてマグロの資源管理に対応できないかと研究している。

そのほか、こういった形で、漁業に対して、様々な悪影響を及ぼすような因子、今回は、ザラボヤについての研究や、こういったものを研究テーマに据えながら、沿岸漁業の支援をしていくような研究をしている。

次に、塚越助教が持っている研究室、水族遺伝学というジャンルについてだが、岩手のサケを何とかして、以前のような状態に戻すことができないか、遺伝子レベルで何とか貢献できないかと研究している。DNAを使うことで、遺伝的な問題が果たしてあるのか、ないのか、そういったものを明らかにする研究を行っている。

次に、もう一つの平井教授が持っている研究室は、水産増殖学を研究している。新たな養殖資源として、例えば、サクラマス。釜石の人たちにとっては、ママスといったほうがわかるかも知れないが、こういったものが三陸の養殖対象資源となり得るかどうかといったことを研究材料として、進めている。

この後、今回参加しているそれぞれの研究室の学生から、自らの研究テーマについて、紹介してもらうこととしている。

○漁業資源生態学研究室（阿部さん、吉川さん）

後藤准教授の研究室から発表させていただく。

最初に、サケグループは、安家川由来のサケの2018年級稚魚の分布と食性や成長特性に関する研究ということで、夜にサケの稚魚を採取して研究している。

次に、安家川における陸封型サクラマスの食性と成長に関する研究ということで、こちらが調査の時の写真である。

次に、資源グループは、ババガレイの成長・成熟特性に関する研究と、大槌湾奥砂浜域における生物組成に関する研究、マコガレイの初期生活史に関する研究ということで、魚の耳石などをとって研究を行っている。

次に、生態系グループは、大槌湾奥砂浜域における生物組成に関する研究、魚類相把握を行っているのと、次は、自分が行っている、大槌湾奥砂浜域における生物組成に関する研究で、底生生物層について、動物プランクトンの研究を行っている。

最後に、増養殖グループは、養殖アカモクの成長特性に関する研究と、ヨーロッパザラボヤ、こちらは今、大学院2年生の先輩が行っている研究だが、成熟特性に関する研究を行っている。

○増養殖分野研究室（遠藤さん、櫻井さん）

続いて、平井研究室の発表を行う。平井先生の紹介をさせていただく。平井先生は、岩手大学に赴任する前に、関東圏の大学で錦鯉の研究をしていた。主に養殖やホルモンなどの生理学について研究されていた方のもとで、私たちは、勉強している。

研究室の紹介を行う。私を含め、学部生の3年生4名と研究員1名で構成されている。

主に、ニジマスやサクラマスなどのマス科の魚の養殖に向けた研究がメインで行われている。

現在、僕たちは、卒業研究のテーマが決まっておらず、卒業研究に向けた魚の飼育や飼育環境につ

いて勉強している。

主な研究内容としては、高温耐性ニジマス、岩手県と富山県のサクラマスの飼育環境の比較を行っていたり、アメマスのホルモン調整を行ったり、疑似雄についての研究を行っている。研究ではないが、ウニ、ナマコの飼育や今後の実験に使用するニジマス、シロザケなどの飼育を行っている。一つずつ詳しく話していきたいと思う。

最初に、高温耐性ニジマスの飼育についてだが、右側の写真が高温耐性ニジマスで、ニジマスはもともと、水温が12度以下の冷たい環境の中で生きている魚である。こちらでは、13度以上の、少し暖かい環境の中で飼育していて、ニジマスはもともと冷たい水の中で生きている魚なので、このような高温の環境の中でも生きられるかどうか、飼育しながら観察している。

そのほかにも、僕たちが研究するために釜石に来た当初に、八幡平市にある岩手県内水面水産技術センターから、小さいニジマスを貰ってきて、それを僕たちは、飼育している。左側の写真の丸い水槽の中に、200匹から300匹ぐらいの小さいニジマスを飼っていて、ニジマスのサイズに合わせて、餌のサイズを変えながら、飼育をしている。

次に、サクラマスの比較飼育だが、動画があるので見ていただきたいと思う。先に富山県産のサクラマスに餌をあげた時の様子である。

〔動画再生〕

サクラマスは、もともと臆病な魚であるのに、富山県産のサクラマスは餌をあげるとこのように、人に寄ってきて食べる。次に、岩手県産のサクラマスの動画である。

〔動画再生〕

岩手県産のサクラマスは、餌を撒いても、全く寄ってこない。人が寄ってくると、すごく臆病なので、人と逆方向に逃げてしまっていて、同じサクラマスでも、このように性格というか、様子が全く違うので、養殖をする上で、その違いなどを観察しながら、飼育している。

次に、アメマスの疑似雄ということで、こちらは、もともと遺伝的には雌を持った魚にホルモンを使って、精子を出せるような雄に変えたアメマスを今、飼育している。

今、この写真にあるように、ホルモンの種類や与える量などで、虫かごに入れて区別して飼育している。

続いて、ナマコ・ウニの飼育だが、ウニは、もともと、海では、昆布を食べるが、飼育していると、色々な食べ物を食べる生き物で、僕たちが今、家庭から出た生ごみや実験などで死んでしまった魚なども与えている。そうすると、次の日には、水槽の中が空っぽになっている、食べる生き物である。それを、卒業研究に使えるかどうか分からないが、ウニの食性などについて、卒業研究にできるかもしれないということで、今、飼育をしている。

続いて、写真の真ん中にあるナマコだが、こちらは、ウニが食べた残りやフンや尿を全部、ろ過してくれる働きを持っていて、こちらの水槽の中を生物が行うろ過システムということの研究に使えるかということでこちら、今、飼育している。

今後の僕たちの研究テーマとしては、ニジマスの海水適応を考えている。もともと、ニジマスは淡水魚であるが、同じマスの仲間であるサケを見てもらってもわかるとおり、マス科は、海で飼うとすごく大きくなって帰ってくる。ニジマスも、もともとマス科の仲間なので、海水で飼うことで大きく飼育できないかとして、ニジマスの海水適応について進めていこうと思っている。

その他、同じマス科の海水適応、マス科でもできないかということ卒業研究にできるのではないかということで、僕たちの今後の研究テーマとして挙げられている。

このような研究テーマを進めていくことで、今、日本各地でブランドサーモンとして、ニジマスを大きく育てる養殖のブームになっており、ニジマスの養殖に向けて自分たちの研究が、養殖業の発展とか、効率性とかの向上に向けて役に立つのではないかと研究を進めていくところである。

○水族遺伝学分野研究室（秋津さん、小田さん）

最後に、塚越研究室の研究内容について、説明させていただく。

研究室で、主に研究の対象にしているものは、シロザケと言って、一般的にサケとして売られているものと、サクラマス、カラフトマス、カジカ、アユ、アワビ、サケ類の寄生虫のDNAを主に解析している。魚類の遺伝解析については、目的として次のようなことがある。

魚類の分布調査というのは、まずは、研究室に所属している先生が入って、網を持って、カジカや魚を捕って、捕った魚のヒレなどを切って、その遺伝子を見て、何処由来の魚なのか、どの河川にこれぐらい生息しているということを推定する研究である。

また、育種に向けた飼育試験というのは、先ほどの平井研究室と少し似ているが、ブランド化や商品にするための雑種の成長特性の把握や、環境を変えた際の成長特性の違いなどについて研究している。

これは、サケの水槽だが、手前がサケの適水温、だいたい14度くらいで管理されている水槽で、奥にもう一つ見えるのが、水温が変動する水槽である。手前の適水温で管理されているサケのほうが、見た目でも成長の良さがわかる。餌をあげた時も凄く元気に食べてくれる。次の写真が、普段学生がいる研究室の様子で、サクラマスのDNAを採っている。

次に、卒業研究内容について、最初に僕の取組を紹介させていただく。

僕は、岩手県内の河川に遡上するサクラマスの遺伝解析と、サクラマスは秋に川に上って、産卵するまで川で待機している集団と、産卵期になってから、一斉に上がってくる集団の2つの集団がある。その解析を行いたいと考えている。

まず、DNAを使う利点として、形態では判別できないくらい腐ったものでも、種の判別ができたり、雌雄の判別ができたり、DNAを解析することによって、どの川で生まれたサケなのか、サクラマスなのかを判別できる。現在、岩手県では、サクラマスの増殖事業を行っているが、過去に挫折というか、諦めてしまっていて、再び、挑戦しているが、もし、今回、続かなければ、もうやらないのではないかと思う。僕は、岩手県出身なので、うまくいってほしいと思っていて、その一助となるような結果を出せる研究をしたいと思って、今、こういう研究に取り組んでいる。

遺伝解析をすることによって、どういう一助になれるかと考えた際に、各河川のサクラマスの資源を管理するとなった場合には、遺伝特性を見て、川ごとの集団を的確に分けてあげて、集団から採取した卵と精子で作った種苗を離すことによって、的確に河川に帰ってくる確率も上がるのではないかと、回帰率が上昇するのではないかと考えている。

サクラマス資源の管理としては、養殖事業の持続化ということで、各河川ごとの管理がスムーズに行えるようになれば、養殖事業の拡大につなげられるのではないかと考えている。この写真がサクラマスだが、これは春集団として、春に遡上してきて、川に待機している状態のサクラマスで、川にいる状態の時は、まだ、海から上がってくる時の状態と同じように、キラキラした状態である。これは、昨年に盛岡市を流れる雫石川で釣ったサクラマスである。

次に、私が研究しているのは、サケに寄生する条虫のDNA解析についてである。

条虫というのは、俗にサナダムシがサケに寄生しているもので、その研究をしている。

まず、魚類の寄生虫はあまり研究がされていないため、いつどの時期に、どのような種が寄生しているのかわからない。特に、サケの寄生虫の研究では、北海道のサケが中心で、岩手県沿岸の三陸のサケの先行研究例は、ほとんどない。

DNAを使う利点としては、寄生虫の幼虫は種間で特徴が酷似しているため、正確な識別をすることが困難だが、DNAを使うことで、形態的にはわからない種判別もすぐにできるようになる。そのため、どの時期に、どのような寄生虫が寄生するのか、寄生虫相の把握をすることができる。

考えられる結果及び可能性だが、様々な河川や海域、時期でサンプルを採取、解析することで寄生虫相の違いを知ることができる。その結果、宿主の回遊経路の違いや餌の違いの有無を考察すること

ができる。寄生虫のDNAを解析することで、対象となる魚類がどの海域を回遊してきたのかを知ることができる。寄生虫というのは、餌から宿主となるサケに食されることで寄生する場合と体表にそのまま付着する場所があるが、DNAを調べることで、どの海域でついたのか調べることができるので、知ることができる。

検出場所の違いによる寄生虫相の違いだが、写真の右側が幽門垂で左が胃腸の寄生虫である。写真でぱっとみると同じように見えるが、よくよく見るとちょっとした違いがわかるかもしれない。

◆ 参加者自己紹介

○秋津さん

私は、岩手県盛岡市出身で、ずっと盛岡市に住んでいた。

現在は、先ほど紹介したサクラマスの研究をしていて、将来も岩手で働きたいと、今は考えている。

○阿部さん

宮城県仙台市出身で、今は後藤先生の研究室で、大槌湾のマコガレイの稚魚について研究している。

将来は、まだ確定はしていないが、自分が勉強したことを、どういう形でも良いので生かせるような職に就ければいいなと思っている。

○遠藤さん

岩手県奥州市出身で、内陸出身ではあるが、小さい時から釣りとか、海が好きなので、水産について学ぼうと思い、釜石市に来た。

将来は、公務員として岩手県内で働きたいと考えている。

○小笠原さん

岩手県釜石市出身で、後藤先生の研究室で、養殖のアカモクの成長特性に関する研究を進めているこうと思っていて、今は就職活動を中心に行っている。この研究と就職活動が両立できればと考えている。

○小田さん

岩手県洋野町出身で、今は、先ほども発表したように、寄生虫のDNA解析の研究をしている。

将来は、研究職に就きたいと思っていて、このまま寄生虫の研究を続けていけたら良いなと思っている。

○櫻井さん

宮城県亶理町の出身で、亶理町はハラコ飯やホッキ飯がおいしいので、ぜひ食べていただきたいと思う。

平井先生のもとで、養殖について日々学んでおり、研究に使う魚たちを飼育している。

10月から釜石市に来ていて、若者の活気がないなと感じている。それで、私たちが、色々なイベントに参加して、活気ある釜石市、三陸にしていきたいと思った。

それと、釜石市は鹿が多すぎて困っている。それを何とかして、みんなで鹿鍋を食べられたらなと考えている。

○吉川さん

青森県青森市出身で、今は、先ほども発表させていただいたが、後藤先生のもとで大槌湾の回帰性生物相について研究している。

将来としては、まだ確定していないが、子供たちなどに水産物に興味を持ってもらえるような職に就けたらなと思っている。

○谷瀬さん

北海道札幌市出身で、後藤先生の研究室で、ババガレイの成長や成熟特性に関する研究を行っていく予定である。

釜石市に来てから2カ月ほど経ったが、初めて三陸沿岸に住んでみて、自然が豊かで美味しいものもたくさんあって、良い地域だなと実感している。

◆ 意見交換

○伊藤勢至議員

応援をしたいと思い資料を持ってきた。

一つは、現在、サケについて、陸上での養殖がどんどん広まっており、今年の2月に三重県津市で実証が始まっているということである。千葉県の方が取り組んでいるようなので、情報提供したいと思う。

それから、皆さんは、九州に行ったときに、辛子明太子をお土産に買ってくることがあるかと思うが、九州福岡の辛子明太子の90%は、北海道で獲れたスケトウダラの卵である。そのうちの1割は、岩手三陸の北部で獲れたスケトウダラの卵である。それを九州に持っていき、味つけをして、私たちが買ってくる。皆さんの代には、逆があっても良いのではないか。三陸産のものを九州に売り込めるように、そういうことがあっても良いと思うので、後で、参考にしていただきたいと思う。

質問だが、安家川で養殖に取り組んでいる方がおられたが、安家川には、日本でも数少ないと思うが、カワシンジュガイというのが生息している。国内でも珍しいチョウセンアカシジミが住んでおり、これも環境、川の状況が非常に良いということに関連しているので、その部分も参考にされたらよいのではないかと思った。

サクラマスの養殖で、富山県と岩手県の話があった。釜石市でチョウザメの養殖をしているが、人間が餌を与えるときに寄ってくる魚は、大きくなって放流したときに、全部、やられてしまう。自分より大きな魚が来た時に、寄って行って、食べられてしまう。むしろ、人が来た時に逃げるほうが、自然界に離れたときに、優位だという説があったので、参考にしてほしいと思った。

中国の大連に行ったときに、養殖場でコンブやワカメを餌にあげているが、一番、最上流にいたのが、アワビだった。次の層にウニがいて、一番、最後の層にナマコがいた。つまり、こういう順序で、全部きれいに食べてしまう。ナマコがいるところは、海がきれいなのでナマコがいるのか、ナマコが生きているので海がきれいなのか、その辺も環境に影響しているのかと思ったところである。

次に、サケは沿岸にとって、大事な魚だが、岩手県の正月の魚はサケと言われてきた。宮城県は、ナメタガレイで、福島県に行くときブリである。食生活が地域でやはり違う。新潟県村上市もサケで有名などころであるが、回帰率がここ10年来、ほとんど変わっていない。放流した稚魚がたどってくるコースと太平洋側のサケのコースが違うのか分からないが、太平洋側のサケの回帰率が激減状況であり、回復していない。この部分については、岩手県だけ見ても比較、検討ができないだろうから、日本海側の新潟県村上市のサケも参考にすれば、結果が良いのではないかと思った。

新潟県のサケと岩手県のサケの違いを一言で言うと、岩手県のサケは、顎にひもを通して吊るすが、新潟県は、尻尾を上にして吊るす。完全に逆である。

○岩崎友一議員

大きな視点になるかもしれないが、皆さんがこれから卒業して、就職先、進路の関係で水産の仕事に就きたいという人が多かったと思うが、水産の魅力をどのように感じているのかと、地方創生を進めていく上で、農林水産業がキーワードとなり、水産業は、漁業と流通加工も含めて大きなキーワードだと思うが、三陸がしっかりとご飯を食べていくために、何が問題で、どうしていけば良いかという答えを持っている人がいれば、意見を聞いてみたいと思う。

〔回答：遠藤さん〕

水産業の魅力だが、海に生き物がいるというだけで、ワクワクする。釜石に来てから感じたのは、漁師さんと仲良くなって、船に乗せてもらったことがあった。色々話してみると、海の生き物を相手にしているから、自分たちが知らないようなことも当たり前話してくれる感じで、漁師さん一人一人の考え方が深いなと思い、海を相手にしている漁師さんは、かっこいいなと思う点が、水産業の魅力だと思う。

地域振興についてだが、釜石市に来てから思ったのは、地元の人たちは、話してみると面白い人がいたり、魅力的な人が多いと思ったが、それを外に対して発信する力がないかなと思った。お祭りに参加したりしたが、他所から来ても、釜石市の人たちはウエルカムな感じで迎えてくれたりするので、参加してみないとわからないというのはなかなか外に伝わらないと思う。岩手県全体として考えられると思うが、発信していく力がこれから必要になってくるのではないかなと思う。

〔回答：小笠原さん〕

漁業者の生活を支えるという面について。私は、釜石市出身で、大学が盛岡市で、ずっと岩手県を出たことがなくて、今、就職活動をしているが、東京とか、関東の民間企業、商社にインターンシップとして参加している。冷凍食品を扱っている商社に行っているが、その会社では、三陸の水産物を扱いたいという声があるが、それは商社側が思っていることで、商社側から三陸への発信力があるが、三陸の人たちの発信力が少なく、自分から、こういう魅力があるよというように、話して売り込む力がまだ足りなくて、必要だと思っている。そういう足りない部分を民間企業やボランティア団体と協働で事業をすることによって、三陸のブランド価値も上がると思うし、岩手の魅力を民間商社を通して、全国に知ってもらえるきっかけになると思う。

水産業ではないが、例えば、無印良品というメーカーがあるが、仙人秘水という水を使って化粧品を開発されていたりするので、そういう部分で、化粧品が開発されているということも釜石の人でも知らない人がたくさんいると思うので、自分が発信していこうという気持ちが少ないことが課題だと思う。岩手の魅力を発信できるように、岩手県だけではなくて、民間やボランティア団体と協働して、力を合わせてやっていくことも必要ではないかなと思う。

〔回答：小田さん〕

私の家は漁師をしていて、生まれた時から海が近い環境にあった。私が思う、水産の魅力だが、海は外側は見えるが、中にどんな環境があるか見えず、中に入って初めてわかる。高校生の時、海女のバイトでウニを獲っていたが、磯焼けが深刻でコンブが少なかった。その割に、環境に負荷はかかるが、観光客のためにウニをたくさん入れ、実演して獲っていて、ちょっと違うと感じた。

そのような方法でしか発信ができないということは、発信力が弱いのかなと感じた。海が綺麗なのが一番の魅力と思い、いろんな人に魅力を知ってほしい。そこを地域振興とつなげていけばと考える。環境負荷などを少なくする研究を大学がやっていくべきと思っており、大学との提携を深くやっていければと思う。

○岩崎友一議員

温暖化で海水温が冬になっても高い。サケは海水温が13度以下にならないと戻ってこないと言われている中で、釜石沖の海水温も高く、特に震災以降は回帰率が低いという状況である。何年か前は、伊勢エビは銚子あたりまでしか獲れなかったが、山田町で伊勢エビが獲れるなど、海の環境が変わってきている。皆さんはその変化をどう考えているのか。そういったことを今の研究に生かしているのかどうか。先の話にもなるが、それ故に今研究をしているというつながりがあれば伺いたい。

〔回答：櫻井さん〕

温暖化、気候変動はこの付近でも顕著に見られる。私は釣りをしており、アイナメは11月くらいに水温が下がってくると、沖から湾内に帰ってきて釣れるようになるが、最近は湾内で釣れない。釣りの大会に出ても、周りの人も釣れていない状態である。温暖化、気候変動で釣れないのかと思う。

釣りに行き、漁師と話した時は、水温が下がらないから、アイナメも悪いという話も聞いた。温暖化で水温が低下しないということがこのあたりでも見られる。

今後もすぐには水温は下がらないと思う。20年後に下がっているかと言われたら、下がっていないと思うし、これより高くなっていくと思う。変化に順応していかなくてはいけないと考えている。自分たちの代では終わらないと思うが、自分たちの後輩、さらにその後輩たちが水温の高いところでニジマスを育てていることが実になって育てていければと考える。

〔回答：吉川さん〕

地球温暖化で魚がこっちに来ていないという状況もあるが、逆に水温が上がったことで、来ている魚も見られると思うので、そういう魚を扱っていくということに重点を置いていくことが今の水産業に合っているのではないかと思う。

○阿部盛重議員

皆さんの研究のゴールはどこを想定されているのか。また、ゴールはなく、もっと先の第2、第3段階もあるという場合はそこをどのように対応されていくのか。皆さんの中では、研究で起業しているという考えがある方もいると思うが、その場合はどのような企業として起こしていくのかの3点を伺う。

〔回答：谷瀬さん〕

私はババガレイの成長特性についての勉強を進めていきたいと思っているが、水産の中で漁獲の問題が大きくなっている。獲り過ぎなどの乱獲の問題があり、どの程度資源があり、どの程度漁獲していけばよいかということは、大事なことだと思う。研究で成長段階がわかることにより、資源の保護にもつながると思い研究を行っている。

〔回答：秋津さん〕

先ほど紹介させていただいたが、私は岩手県の河川で獲れるサクラマスの研究をしている。ゴールとしては、現在岩手県が行っているサクラマスの増殖事業が、中断することなく、これからも持続可能な事業であり続けることである。また、サクラマスが河川に帰ってくることが他県にも知れ渡れば、サクラマスは釣りで人気の魚なので、釣り人が来て釣りをしながら、盛岡市とかいろいろなところに泊まって、サクラマス関連でお金を岩手県に落とすようになってくれるようになれば、自分のやった経験が生かされたと思う。

〔回答：阿部さん〕

研究の内容はそれぞれ違うが、養殖や、資源動態、生態学で魚の特徴を把握することで、魚がどこで獲れるか、どの時期にどの場所にいるか、どのくらいの水温だと生息しているのかを把握することで、その結果で漁業の漁獲高や、漁獲してはいけない時期もわかってきて、最終的に漁業につながっていくのではないかと考えている。

○田村勝則議員

先ほども申し上げたが、私の生まれは山田町である。山田町では織笠川の河口でのアサリ獲りが名物であった。ところが、東日本大震災津波で砂浜が駄目になった。潮干狩りをするために、買って来たアサリを放流した中に中国アサリが入っていて、そっちの方が元気になり、アメリカザリガニのように地元のアサリが激減して、いまは潮干狩りができない状況になっている。

三陸地域の資源というのは、観光ときれいな水と砂浜再生、そして海を生かした潮干狩りとか、サケのつかみ取りとかいろいろあると思うが、そういった水産資源が残念な状況だと思っている。

質問は2つある。先ほど情熱が必要だと申し上げたが、下町ロケットを見ている人は何人いるか。もう一つは、皆さんが研究するためには、先生をはじめ学校もそうだが、それなりの研究費を確保してやっていかなくてはならない。そのためには県の補助がそこに関わっているわけだが、もう少し県に我々の研究費を1千万円ずつ出してくれないかといった率直な意見があれば、先生は言いにくいだろうから、学生の皆さんに三陸振興のために声を大にして発言していただければと思う。

○城内よしひこ委員長

それでは、下町ロケットを見ているという方々は手を挙げていただきたい。(誰も手が挙がらず) 残念な結果だが、研究費等について皆さんから意見があれば伺いたい。

〔回答：遠藤さん〕

ニジマスの血液測定を行うときに使う機材は人間の病院で使うような機材を使うが、1匹のニジマスから血液を採取するのに、2,000円かかる。それを自分たちの卒業研究では100匹から200匹と、それ以上行っていかなくてはいけない。平井先生もおっしゃっていたが、学生の実験にお金がかかり過ぎてしまう。今度、もっと予算を抑えられるような新しい機械を買いたいと言っていたので、率直にどんどんお金を渡してほしい。高価な機械を買う機会も多くなってくるので、お願いしたい。

〔回答：阿部さん〕

三陸地域に水産に特化した大学は岩手大学しかない。海洋実習や、サンプリングという研究に使うものを獲りにいくこともあるが、他の大学や研究機関の協力のもと、船を出してもらって行っている。岩手大学にも船があれば、自分たちの大学の船で海洋実習もサンプリングもでき、研究がもっとはかどると思うので船があればいいと思う。

〔回答：後藤准教授〕

岩手県水産陸技術センターといろいろ共同研究をしていて、岩手丸を利用させてもらっている。岩手丸、北上丸と二隻あるが、これから、我々のいろいろな研究の中で、こちらを利用させてもらいながら、三陸の資源研究、海洋の研究に使わせてもらえたらということはある。幸い、いろいろお願いしながら、使わせてもらう機会をこれから増やしていけそうな感じではあるので、我々が船を持つことは今のところ現実的ではない。船に関わる金を出すくらいだったら、研究費を直接もらった方が早い。いろんな面で県の協力をいただきながら、研究を進めていきたい。

学生の実習についても宮古水産高校のご協力をいただき、今ちょうどそこに泊まっている海翔を利用させていただいている。実習などで協力いただける体制は出来上がってきているので、そういったところにもご支援いただけると助かる。

○田村勝則議員

明日、三陸復興の会議があるが、やはり三陸復興はこれからで、まだまだということで、そのためには本日のテーマが本当に重要だと思っている。我々としては予算的にどうなのかと心配な部分もあったので、率直に阿部さんにお話いただいたのは貴重な観点だと思う。

○高田一郎議員

今日の意見交換会のテーマが地元の資源を生かした三陸地域の振興についてだが、言うのは簡単だがなかなか難しい。さきほど、私が内陸に住んでいて、農業をやっていると話したが、農業は大変だが、農業技術は進歩していて、トマトは単収が3倍から5倍となり技術力がどんどん発展してきている。

漁業は魚が獲れないと、水産加工業も大変という状況でどう浜を元気にさせていくかということで、知恵を出していかないと大変だと考える。先ほど、発信力を高めるという話があった。具体的にどういう発信をしていくことが必要なのか、それ以外にも浜をもっと元気にするために、こういう振興策が必要じゃないかという若い人たちが思っていることがあればお聞かせいただきたい。

今日は後藤先生がいらしているが、後藤先生の研究テーマは三陸地域に生息している漁業の資源の特性を調査して、持続可能な漁業を振興していくということだが、海洋資源が大きく変化し、獲る量を抑制するという中で、どう持続可能な漁業にしていくかということとはなかなか難しく、大変だと思うが、いま現在研究している中で紹介できることがあれば、先生でも学生でも結構だが教えていただきたい。

〔回答：遠藤さん〕

発信力は、全国的に有名になることが大事になると思うが、この前伺った宮古市の共和水産株式会社では、イカ王子と自分で名乗って全国的に売り出している方がいた。宮古市は全国で一番タラの水揚げがあるということで、タラフライにして売り出している。それが全国ネットのバラエティー番組に取り上げられて有名になり、何か月待ちという状況になっている。テレビやSNSを使っていろんな人の目に留まる機会を増やしていき、ただ発信するのではなく、イカ王子のように興味を引くような言葉をつけて、発信していくことが必要ではないかと思う。

○伊藤勢至議員

イカ王子のお父さんと同級生である。

北里大学水産学部（現在の海洋生命科学部）を卒業した八木さんという方と5年くらい前に話す機会があった。彼は、自分で船を出して、定置網に行き、ライブで写した画像を全国に配信して、船の上でオークションを行い、値段を決めて送るといった良い商売をしている。彼は静岡県出身だが、静岡県人は仙台市から北はみんな北海道だと思っていると言っていた。こちらから南を見たときに、南にある県を全部言える人はなかなかいないので、そういうものだと思う。

いいものをつくっている三陸の人達の発言力はあまり上手じゃない。アピールをして、いいものをそれなりの単価で売っていくことがあなたたちの世代では非常に大事になってくるのではないかと知っている。どうも沿岸の人は買いにくるという感じがある。そうではなく、自分の方から発言をして、その分高く売る。収入を得るといことがこれからの人は大切だと思う。

〔回答：谷瀬さん〕

魅力あるものを持っているところに人は自然と集まってくると思う。自分たちがどういうものを持って、どういう魅力を持っているかを自分たちが知ることが大切だと思う。外に発信することも大事だが、近くに住んでいる方々が、地域で自分たちの魅力に気づいて、自分たちが地域にいることを楽しんだり、生き生きとすることで、周りから活性化しているように見えて、自然と人が集まってくるのではと思うので、まずは自分たちの地域を好きになることから始めたらいいのではないかと考える。

〔回答：後藤准教授〕

いまの質問と同じような発信力についての授業を展開している。どうやったら、沿岸地域を元気にできるかをみんなが一生懸命考えている。今日の8人以外の学生も同じようにいろんな意見を持って、地域をいかにして振興していくかというアイデアを出し合っており、我々の一つの自慢として誇れる学生だと思う。

二番目の質問は永遠の課題だと思う。ただし、いま起こっている地球温暖化はIPCC（気候変動に関する政府間パネル）でもこの10年くらいで地球温暖化が加速しているという結論が出ている。特に海の温暖化傾向がここ数年顕著になっており、これに関しては、地球のエネルギーを海の中に貯めこんでいる以上は、もはや避けられない状況となっている。気象庁の判断でも三陸沖については温暖化傾向が認められないということについて、10年くらい前まではそういった結論が出ていたが、最近になって、三陸沖についても、特に冬と秋の水温温暖化が顕著になっており、年間通しても温暖化の傾向が認められている。100年で0.6～0.7度くらい上昇しているという結果が報告されている。

サバの定置網の漁獲シーズンはもともと7月がピークだったが、今は5月から獲れ始める状況になっている。沿岸域にしても、アワビの餌がなかったり、海藻が貧弱になって磯焼け状態になっている。どうやら黒潮の北上の傾向が著しく、その影響が強く、人の手ではどうにもならない状態である。ましてや、地球温暖化に関しては、今いらっしゃる皆さんや、漁業者も含めて、経験したことがないような状況になっている。

ということは、過去の漁師の知恵、経験が今後ほとんど役に立たない可能性が出てくる。ただし、沿岸の漁師に元気になってもらわないと、この地域の活性化はあり得ない。特に宮古地域あたりは、流通加工を中心に発展している町ということもあり、水揚げがない中で流通加工がいかにして生き残っていくかということは、逆に流通加工を中心に栄えた都市としても死活問題になってしまう。それはあくまでも海の温暖化、環境変化に全て起因している問題となっている。

結論から言うと、対応していくしかない。変化する海に対してどうやって地域全体で対応していくかということが一番大きな課題となっている。震災復興というキーワード自体もただ単に津波から現状復旧をするという次元の復興ではなく、本来であれば、同時に進んでいる環境変化に対して、どういった影響が出てくるかをきちんと調べた上で、バランスをとりながら、今後実際に三陸の海がどう変化していくかということに合わせた形の震災復興の到達点を事前に考えながら進めていかないと、結局、例えばサケに関しても、震災前の水準をベースにして全て戻そうとすると、当然この状況が進めばサケの回帰率は下がった状態で、一定レベルまでずっと先まで見通さなくてはいけない。

その中で、例えば2000年代の初めくらいの水準をベースに全体を組み立ててしまうと、例えば、現在の1万トン来ないレベルでサケの全体計画をつくってしまうと、そもそも余った状態をずっと続けられない状態になってしまう。今後、地球温暖化など、様々な環境変化が起こっている。マイワシも獲れ始めて、その一方でサケは獲れない。1980年代であればマイワシが獲れる時代はサケも獲れるプランだったが、そういうことも成り立たなくなっている。

そういうことで、現場の漁業者の知恵と経験がなかなか成り立たない状況である。だからこそ、チームワークだと考える。例えば岩手県水産技術センターや東北区水産研究所、我々もおり、そういうところと、現地の人々がタッグを組むかたちで、実際に適切な動向を予測する。それに基づき、水産業

というスタイルが、先を見通して、先ほど資源管理型漁業という話も出たが、これぐらいのパイの中で、みんなやりくりしなくてはならないということをきちんと理解しながら、資源を管理していくのは当たり前の話になっている。漁業法の改正も国会で通ってしまっている以上は、実際その中で漁業をやりくりしなくてはいけない。

それに基づいている水産業全体も、その枠の中でおさまっていかななくてはならないというバランスをうまく考えていくような施策が必要で、現場の人たちの考え方も少し変えていかななくてはならない。将来的な見通しをきちんと立てたうえで、水産業の全体をつくり上げていかななくてはならないと思う。そういった中で、岩手県水産技術センターの研究者などが、今後、知恵と研究が役に立たなければ、科学的データに裏づけがなければ続いていけないので、そこにきちんとしたバックアップをぜひお願いしたい。

○田村誠議員

今の先生の話聞いて、まさにそのとおりだと思った。三陸沿岸の海というのはホタテ、ワカメ、カキ、サンマ、サケという前浜を中心とした増養殖で生計を立ててきた。したがって、これからも、何とかそれでやっていきたいというのが正直な漁民の人たちの話だと思う。磯焼けと称した、ワカメ、コンブなどの海藻がつかず、アワビやウニがなかなか獲れない、あるいは小さいという状況にある。魚種を変えた加工や、別な形のやり方もあると思うが、当面は今までやってきことをやりたいというのが一つだと思う。

貝毒の発生が段々長くなってきていて、全体的にかなり多くなってきている。貝毒の発生原因がわかっていないという状況だが、貝毒が発生するとカキ、ホタテが駄目になり、そうするとホタテの加工といった加工屋がお手上げになる状況になっている。貝柱であれば良いのではという話も出てきている。貝毒対策は非常に大事な一つのテーマだと思う。

これを何とかしたいということで、そういった研究をしていただいて、遺伝子操作で何かできるかはわからないが、そうしたことも含め、皆さんに研究していただきながら、あるいは磯焼け、ワカメやコンブは海水の水温の関係があると思うが、餌となるようなものが確保できないものかどうか。また、自然相手だとなかなか難しいと思うが、そうした、漁民の意識を変えることも当然必要であるので、そういうところに関しても御指導いただきたい。

〔回答：後藤准教授〕

貝毒に関しては、今おっしゃったように非常に深刻で、既に釜石市周辺で廃業されるような業者も出始めている。基準を少し緩和して、玉で出せるような状態にしたが、もともと岩手県は殻つきの貝を出すことで付加価値があったが、貝柱のみの出荷になってしまうと、先行している陸奥湾や噴火湾、オホーツク海があり、全体的に三陸の価値観が評価されにくいという問題があることから、非常に深刻だと思う。

とはいえ、貝毒問題を急に解決できるかというところとそういうわけにもいかない。ただし、これだけ長期化している要因自体が正直なところちゃんとわかっていない。明らかに環境変動が関連しているだろうというところまでは何となく想像がつくが、直接的な因果関係はまだ明らかになっていない。

短期的には漁業者をいかに支援していくかということが一つ。中長期的な問題として、何らかの形で、一時的に湾の中の養殖場を動かしたりとか、どんな形になるかわからないが、毒の減衰を早めてあげるよう何らかの形の手を早急に考えていく必要がある。短期的と中長期的な問題の解決の二つでやっていかななくてはならない。そういう意味では、地道な貝毒の観測、原因プランクトンの観測、毒が蓄積するプロセスの観測を緻密にやっていかないと原因は特定できないと思う。

我々もそういった研究の中に加えさせていただければ非常にありがたいが、スタッフがそこまでそろっておらず、ノウハウも持っていないので、そこは県の水産技術センターというビッグネームが存

在しているので、そこが中心となって、県の漁業を支援する意味では、貝毒のモニタリングをもっと充実していただけるようにしていただいた方が漁業者の支援にとって早いと思う。

我々としては、磯焼けにしても同じだが、そういったものが海洋環境とどういう関係があるのか、そういった基礎的なところをきちんとお手伝いしていくような形にしていきたいと思っている。漁業に直結するような、観測や解析は岩手県水産技術センターをおいて他にはないと思うので、その調査研究を充実するようにご指導いただきたいと思う。磯焼けについては、基本的に海藻のないところにウニが過剰に着底してしまうことが深刻化する原因にもなる。その原因に関してはかなり明らかになっている。そういったところも、現場の中でウニの量をいかにコントロールしていくかということで、割と短期的にすぐできる話になっている。現場の漁業協同組合とともに、そういった調査と、実際に正しい評価をするという組み合わせで短期的な対策、それと中長期的にどうしていくかという両方で、研究と現場とが結びついていくことが重要だと思う。

◆ 感想など

○城内よしひこ座長

予定の時間となった。本日の意見交換会の感想も含め、また、最後に話し足りないことがあれば、お聞かせいただきたいと思う。

○秋津さん

今日は水産をメインで三陸の地域振興ということで意見交換会を行ったが、私からは水産ではなく、三陸地域、特に釜石市を中心として三陸地域を盛り上げていく策を申し上げたい。

釜石市は今、鉄のまちを大々的に推している。あとは、ラグビーのまちということで、ラグビーパイやラガーラーメンなどいろんなところでやっているが、2019年のラグビーワールドカップが終わってしまったら、せっかく立派な建物をつくって、ワールドカップを行ったが、そのあとラグビーのまちとしてそれをずっと引きずっていくのは地域振興にはならないし、鉄のまちだといっているけどどんどんさびついてしまう。

今はいろいろとものが進化しており、新しいものもどんどん古くなっていく。その中でさびつかないものは人間の感情だと思う。人間の感情をぶつけるツールとして昔から今まで変わらないものは音楽だと思う。せっかくラグビーワールドカップで立派なスタジアムをつくったのに、それがさびついていくのはもったいないので、さびつかない音楽と立派なスタジアムを掛け合わせて、また鉄のまちも掛け合わせてメタルのフェスティバルを釜石のまちでやるのはいいのではないかと考える。音楽というのは常に新しくなっていくので、ものの価値と比較した場合、変わらないので、若い人も音楽を好きな人はメタルを聞きにこの街に来て、活気づいて、釜石に来るということで、水産の魅力などもわかって帰って、釜石がメタルのまち兼水産のまちとして、全国や世界に広がっていったら、弱い発信力も強化されるし、いいのではないかと考えている。

○阿部さん

以前、私たちと釜石市長と地域振興について話す機会があり、市長が言っていたのは、ラグビーワールドカップが終わったら、何も予定がないということだった。イベントを増やしていかないと少子高齢化が街として進んでしまうので、イベントなどが増えていけばいいと思った。

○遠藤さん

地域振興を話していくなかで、根本的に大事なものは、いろんな人がいろんな事を知ることが大事だと思う。今回のように、大学生と県議会の議員の方々が話す機会というのはとても貴重だと感じた。議員の方々から、意見交換でいろいろ話してもらったことも自分たちとしても新しく知

ることもあったので、こういった機会はとても大事だと思った。

○小笠原さん

私たちは3年生なので、岩手県に学生としていられる時間はあと一年半もないので、その一年半の間で、学生ならではのできることを単発的なものだけでなく、長期的にできることを後輩たちに残して行って、地域の活性化になればと考える。

○小田さん

これまでも、そしてこれからも県議会の議員の方々とは話す機会はないと思うが、今の学生のうちに、研究していることや、これまで知らなかった知識も議員の方々から得られたので、それも踏まえて、これから研究して、三陸の水産の一助になれるものを残していければと思う。

○櫻井さん

このような機会は貴重なもので、人生においてもあるかないかということで経験できて良かった。重要なのは、現場に行くということだと思う。現場に行かないとどうなっているかもわからないし、教えられることはすぐ忘れてしまうと思う。例えば、足を運ぶことで、カキ養殖であれば、どうヨーロッパザラボヤという外来種がついて、カキを邪魔しているとか、ホタテが駄目なのはこういうのが駄目だとか、現場に行くことが重要だと思う。これから、何事においても現場に行き現場を知って、それから考えるということが重要だと思う。

○吉川さん

学生として研究を行っているが、多方面からの視野が大切と感じた。一次産業を行っている水産業の人たち、自分たちのような研究を行っている人たち、それをまとめてくれている方々の意見をそれぞれ知って行っていくことが大切じゃないかと感じた。本当にためになった意見交換会だった。

○谷瀬さん

意見交換会を通して地域振興についていろいろ話があったが、他の世代の方が、自分たちの地域の振興のためにどのような考えを持っているか気になった。今回は自分たちが参加したが、違う世代の方や、いろんな世代の方と交流できる場があれば良いと思った。

◆ 感想など

○城内よしひこ座長

率直に、皆さんと意見交換会をできて本当に良かったと思う。そこで一つ伺いするが、皆さん20歳を過ぎており、選挙に18歳から行けるようになったが、身近な選挙で投票に行ったことがある方は挙手を願う。日本で生きていく以上、自分たちが暮らしていく地域あるいは日本を考える上で、皆さんの意見は大事だ。必ず、投票行動はしていただきたいと思うし、それが大きくなねりになっていくと思っているのでよろしくお願ひしたい。

木を見て森を見ずという言葉がある。自分の研究、分野だけに没頭するのではなく、木が覆っている山全体を俯瞰して見られるような感性を持っていると、より自分の研究も生かされるのではないかと。時として、研究の壁にぶち当たったとき、一歩離れてみるといろんなものが見えてくるような気がする。ぜひ、そういう目を持ってほしいと思うし、それぞれ進む現場でも大事だと思う。現場に行ってみないとどんなものも見えてこない。私もこうして皆さんの現場にきて皆さんのご意見を伺って、それを県政全体に反映させることが我々の仕事でもあるし、それが皆さんにも等しく言えることだと思う。どうか、これからも実りある研究をして、ひいては、日本のためになるような研究、働きをして

ほしい。

また、ここにいらっしゃる皆さんは同期であり、そのネットワークはその後も十二分に生きてくると思うので、友情関係は大事にしてほしいと思う。一人で卒業して、ニートにならないように、自分の足で一歩一歩進んで行っていただきたいと思う。

冒頭にも申し上げたが、本日頂戴した御意見、御提言については、県議会の全議員が情報共有し、今後の議会活動に活かしていく。

本日は、お忙しいところ、御参加いただき感謝申し上げます。

以上で、意見交換会を終了させていただく。